　今はSNSによって資本主義社会の「物象化」がさらに顕著となっている時期である。人間相互の関係はいいねの数やコメントによって質的に均質化され、数量化される。それが生み出す時代の錯誤とは、ラカン的なOther, つまり自己発現は物象化された規範内での顕在化を通してのみ（つまり所有の範囲内でのみ）可能であるというものだ。

　ストア派哲学の流れを汲んでいた哲学者ドゥルーズは晩年、病と実存的苦しみに耐えかねて自ら命を絶った。これは、ストア派哲学者としてはごく自然な結末であったのかもしれない。なぜなら、ストア派の哲学において自殺は自己の自由の表現形態であり、自由選択の末の行動と解釈されるからである。しかし、自殺とは本当に自由選択の末の行動、つまり自由な行動であるのか。この問いを、本レポートで検討していきたい。

　まず自殺という現象を理解するところから始める。自殺とは、自分の命を、自らの意思に依って終わらせることである。また、自殺は人間以外の動物ではほとんど観察されない事象である[[1]](#footnote-1)という事実は、自殺が理性を持った主体に特有の現象であることを示唆している。ここで、自殺を遂げる動機を精神分析学的に見てみる。

　精神分析学において、個人はその原初状態（赤児の状態、理性を獲得する以前の状態）では世界と自分の区別がついておらず、第一次的絆で世界と結ばれているとする。この状態の個人は自他の区別をつけず、主観的世界と物的世界の融合により世界と調和的な関係を保って存在している。しかし、人間は成長の段階においてこの第一次的絆を切断する。フロムはこれを赤児の母との断絶と世界には属するが孤立的、独立的存在としての明確な自己意識の確立と定義し、ラカンはこれを鏡像段階論で自己が、物的領域での統一的存在であり、かつ鏡や他者に映るような客観的に把捉された（有限的な）存在であることの認識であるとした。第一次的絆の切断は、当初人間が感じていた世界との調和的共振性と確実たる世界への帰属感を喪失させる。なぜなら、第一次的絆に結ばれている限り人間は世界と合一であるが、その絆が失われ、人間が自己の存在の限界を認識して理性を獲得すると[[2]](#footnote-2)、直ちに自他の二項対立が意識され、自分の支配の範疇を超えた不確実な他の世界に属する孤立的な存在としての自分に気づくからである。これが意味するところは、凡そすべての理性的な人間は、自他の対立軸の合間で絶えず悩まされ、不確実性に満ちた他の世界との関係のなかで不安を抱えているということである。

　人間はこのような不安に直面すると、それを解消しようと努めるが、それは多くの場合間違った方向への努力となる。不確実な他の世界が引き起こす不安を超克するために、人間は度々世界の不確実性そのものを排除しようとする。この試みを最もよく体現したものが所有である。人間はものを所有することその対象を不確実である他の世界と分画し、自の世界に取り込む[[3]](#footnote-3)。このように所有を通して自己を拡張し、世界を自分に従属させることが世界を自身のコントロール下にある確実な存在として措定する。ここが僕の日向ぼっこする場所だ。この発言には、日向ぼっこの場所を分画して所有することで、自の領域内の確実たるものとしようという試みがあり、これが人間の全災厄の縮図である。というのも、人間は真に他を所有し、自に組み入れることなんかできないのである。生とはその本質から流動的、不確実なものであり、そこに確実性を設けることなどできないのである。完全なる確実性とはすなわち不動で普遍なもの、死を意味するのである。しかし、人間は所有を通した支配と確実性の錯誤から逃れることができない。近年ではSNSの台頭などが人間関係の「物象化」（廣松渉）をさらに推進し、人間関係が均質化・数量化されて「いいね」のような形で所有されるものとなっている。

　ここで話を自殺に戻す。人間はあらゆる局面、社会の諸相で不確実性を確実性に変えよう、つまり所有して支配しようと試みるが、ほとんどの場合それは失敗に終わる。結局所有の対象を確実に支配することは不可能であり、個人は絶えず不確実性に起因する不安に悩まされる運命にある。このような不確実性を一挙に確実性に変え、自己の所有を貫徹して不安を乗り越えようという最終的な行動が自殺である。死とは唯一確実であるものであり、人間は自ら死を選ぶことにより、生の不確実性を抹消し、自分の生を取り返そう、生をコントロールしようというのである。人間は自殺によって自分の意に沿った確実的な生を築こうとするが、この過程において生がしまうというパラドックスが生じる。そして、このように解釈する自殺は自由選択の末の決断ではなく、実存不安に対する反動的な行為である。ここに自由があるとは考えにくい。

　それでは、死は自由選択のなかで選択肢として存在しないのかと聞かれると、それは絶対に違うと私は思う。死とはすべての人間に不可避に到来するものであり、共有できない個別的な現象である。つまり、死とは人間にとって最も私的な領域の出来事である。それを社会的規範や国家、さらには哲学等の言説が縛ることはできない。死を縛ることは、個人の自由を侵害する行為であり、自由を侵害される個人は最も私的な領域である「死」にまで（不確実的で自身の支配の範疇の外にある）他の世界の影響力が浸透してくれば、さらに自殺へと向かう心理的動機が強まるだろう。自殺は決して人々から選択肢として取り上げられてはならない。自殺とはすべての人間が有する、自由選択の選択肢である。しかし、自殺を選ぶということは、それが自由選択ではなかったということを示しているというように私は考える。自殺は、自由な個人であれば絶対に選ばないような自由選択の選択肢なのである。ドゥルーズの自殺は彼の自由の自己発現であったとは私は思わない。しかし、彼が自ら命を絶ったことは、自殺という選択肢を排除しようとする世界の潮流に争い、後世の人々に自由選択を可能にする基盤を整えたという意味で、非常に有意義な出来事であった。

1. 動物も自ら死を選ぶような行動をとることが観察されているが、それはほとんどの場合群れや種の生存に自分の死が貢献する場合である。例えば、パラサイトに感染した動物が同種の仲間への感染拡大を防ぐために自ら死を遂げる場合がある。稀に動物が個体の都合や感情的状況により死を選ぶケースがあるとされているが、その信憑性は不確かであり、そういった例は極めて少ない。 [↑](#footnote-ref-1)
2. フォイエルバッハがキリスト教の本質の冒頭で示した人間と野獣の決定的違い、つまり人間は個別的な自己を超えた自己の種を抽象的に振り返ることができるが野獣は個別的な自己のことしか認識できないという違いは、ここで言うような「理性」を人間は持っていて野獣は持っていないという違いに収斂する。すなわち、野獣は第一次的な絆（本能的束縛）によって自己を世界と未分な合一とする主観的な認識を有しており、自己を超えた事象を考えることができず、自己を類型化、抽象化することもできない。対して人間は自己の有限性と自他の境界線を認識しており（理性）、それによって自己を超えた事象を考え、自己を類型化、抽象化（自己の種の考察）ができるのである。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 権威主義的な政体への狂奔的服従も同様に説明できる。一見強力で絶対的な支配力を行使する主体に所有されることにより不確実性の排除を試みているように思えるこの現象も、服従する個人（自）が権威主義的政体や集団（他）と自分を同一視し（自他の合一）、結局は自己を拡張して所有の範囲を拡大しようとしているのである。これはあらゆるマゾヒズム的倒錯に当てはまる行動原理である。 [↑](#footnote-ref-3)